

氏 名	高取 健人
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第400号
学位授与年月日	平成25年3月21日
審 査 委 員	主査 教授 磯部 威
	副査 教授 関根 浄治
	副査 臨床教授 内田 靖

論文審査の結果の要旨

人口の高齢化に伴って、脳神経障害による嚥下障害に対して胃瘻造設（PEG）を行う患者が増加している。一方で肺炎は2011年に悪性腫瘍、心血管障害に次いで日本人の死亡原因の第3位となり、特に高齢者では、誤嚥性肺炎が増加している。誤嚥性肺炎はPEGのみでは防げないことが知られており、その予防策は急務と考えられる。誤嚥性肺炎の発症機序としては、嚥下障害に加えて、胃食道逆流が指摘されている。そこで申請者らはPEGを造設して経管栄養投与を行う患者において、胃食道逆流治療としてのランソプラゾール（LP）、クエン酸モサプリド（MC）の誤嚥性肺炎に対する予防効果を明らかとするために、前向きかつ対照との比較試験を実施した。対象は、2009年7月～2011年12月までに市立加西病院において上部消化管内視鏡を用いて新たにPEGを造設したか、もしくはPEGの交換を行った119例である。本研究は島根大学医学部医の倫理委員会で承認され、全例インフォームドコンセントの得られた臨床研究である。無作為に経管栄養投与群（対照群;40例）もしくは各経管栄養前にMC投与群（38例）、LP投与群（41例）の3群に分け、治療開始後6か月間の肺炎の発症率について比較検討を行った。肺炎の発症率はMC投与群では38例中7例（18％）で、対照群の40例中16例（40％）に比して有意に低かった（ $p<0.05$ ）。またMC投与群はLP群の41例中20例（49％）と比しても有意に低かった（ $p<0.05$ ）。特に食道裂孔ヘルニアを有する患者ではMCの効果が高く、MC群では他の2群に比して有熱期間ならびに抗菌薬投与期間の有意な短縮が認められた。多変量解析で、MC投与は誤嚥性肺炎発症の有意なリスク低下因子であり（ $P=0.036$ ）、食道裂孔ヘルニアの合併は肺炎発症の有意な危険因子であった（ $p<0.0001$ ）。誤嚥性肺炎予防の機序としてはMCによる食道括約筋の機能ならびに消化管蠕動の改善を介しての胃食道逆流予防が考えられた。

本研究によりMCの投与は誤嚥性肺炎に対する予防効果を有することが明らかにされたことは意義深い。申請者らは今後、本研究の結果を踏まえ、PEG患者における誤嚥性肺炎予防のための臨床研究を考察しており学術的にも臨床的にも優れた成果である。